

羽衣の架け橋、まぼろしの鉄路

109 静岡聖光学院中学校・高等学校 人文科学部鉄道模型班

軽快なミュージックホーンが響く車内。窓外には三保の松原がうっすらと霞み、遠くに富士山が佇んでいた。かつて一日に一本しか走らなかった幻の鉄路が、今は未来を駆けるLRTとして美しく蘇っている。

列車が速度を落とすと、鋼鉄製の白い巨塔が眼前にそびえ立った。新しく生まれ変わった巴川可動橋だ。

「早くも錆が滲み始めているね。」

隣の友人が呟いた。確かに潮風を浴びる鋼鉄の橋には錆が滲む。だが、この錆こそが現役の港を生きる力強さだ。塔の頂にある羽衣のオブジェや、歩行者らと行き交う鉄道道路併用橋の佇まいから、この路線の地域に馴染む温かさが伝わってくる。

「ガタンガタガタ、ガタン」

新旧の記憶が交差する可動橋の上を、列車はゆっくりとジョイント音を響かせながら渡ってゆく。

「新清水より先は通勤急行となります。ご注意ください。」

アナウンスが響き、LRTは潮風の香りを残して、新しい未来へ向けて滑り出した。